

# 五百句

高浜虚子

青空文庫



## 序

『ホトトギス』五百号の記念に出版するのであって、従って五百句に限った。

この頃の自分の好みから言えば、勢い近頃の句が多くならねばならぬのであるが、しかし古い時代の句にもそれぞれの時代に應じて捨てがたく思うものもあるので、先<sup>ま</sup>ず明治・大正・昭和三時代の句をほぼ等分に採ったことになった。

すなわち  
範囲は俳句を作り始めた明治二十四、五年頃から昭和十年まで、  
即昭和十一年十一月二十日に出版した『句日記』の句までとした

ので、その後の句はこの集には洩<sup>も</sup>れている。

昭和十二年五月二十七日

『ホトトギス』発行所

高浜虚子

# 明治時代

春はる雨さめの衣い桁こうに重おもし 恋こい衣ころも

明治二十七年

夕立ゆふだちやぬれて戻かえりて欄らんに倚よる

明治二十八年

子規を神戸病院より、須磨保養院

に送りて数日滞在。

風が吹く仏来給きたもふけはひあり

明治二十八年八月 下戸塚、古白旧廬こはくきゆうろに移る。  
一日、鳴雪めいせつ、五城、碧梧桐へきごとう、森々招集、運座  
を開く。

しぐれつつ留守守も守もの神の銀杏いちようかな

明治二十八年

もとよりも恋は曲くせもの者の懸けそ想う文ぶみ

明治二十九年

怒ど濤とう岩いをを嚙かむ我わをを神かかとお朧ぼろのよ夜



明治二十九年

海に入りて生れかはらう朧月

明治二十九年

大根の花  
紫むらさきの野  
大徳寺だいとくじ

明治二十九年

山門も伽藍がらんも花の雲の上

明治二十九年

繩なわ朽ちて水くいな鶏なた叩けばあく戸なり

明治二十九年

愚庵ぐあん十二勝の内、清風関

叩けどもく、水鶏許されず

明治二十九年

先生が瓜うりぬすびと盗人でおはせしか

明治二十九年

病<sup>や</sup>む人の蚊<sup>か</sup>遣<sup>やり</sup>見てゐる蚊<sup>か</sup>帳<sup>や</sup>の中

明治二十九年

蚊帳越しに葉煮る母をかなしみつ

明治二十九年

人病やむやひたと来て鳴く壁の蟬せみ

明治二十九年

鶏にわとりの空そら時どきつくる野の分わきかな

明治二十九年

弟で子し僧しにならせ給ひつ月の秋

明治二十九年

松虫に恋しき人の書齋かな

明治二十九年

盗んだる案山子の笠に雨急なり

明治二十九年

元朝がんちようの氷すてたり手水鉢ちようずばち

明治三十一年

石をきつて火食を知りぬ蛇穴を出る

蛇穴を出て見れば周の天下なり

穴を出る蛇を見て居おるからす鴉かな

明治三十一年

間かん道どうの藤多き辺へへ出いでたりし

明治三十一年



しゅんじゅん  
逡巡しゅんじゅんとして繭まゆごもらざる蚕かな

明治三十一年

橋涼み笛ふく人をとりまきぬ

明治三十一年七月二十二日 五月以来母病氣のた  
め松山にあり。八月に至る。

星落つる籬まがきの中きぬたや砧きぬたうつ

明治三十一年

蒲団ふとんかたぐ人も乗せたり渡舟

明治三十一年

柴漬ふしづけに見るもかなしきこうお小魚こうおかな

明治三十一年

耳とほき浮世の事や 冬籠ふゆごもり

明治三十一年

鶯うぐいすや文字も知らずに 歌心うたごころ

明治三十二年

亀鳴くや皆愚おろかなる村のもの

明治三十二年

薔薇ばら呉らくれて聖書かしたる女かな

明治三十二年

五月雨さみだれや魚とる人の流るべう

明治三十二年

蓑虫みのむしの父よと鳴きて母もなし

明治三十二年九月十日 根岸庵例会。

稲塚いねづかにしばしもたれて旅悲し

明治三十二年九月二十五日 虚子庵例会。会者、

鳴雪、碧梧桐、五城、墨水、麦人、潮音、紫人、

三子、孤雁こがん、燕洋えんよう、森堂、青嵐せいらん、三允さんいん、竹

子くし、井村、芋村うそん、坦々たんたん、耕雨。後おくれて肋骨ろっこつ、

黄塔、把栗来る。

十月一日、松瀬青々まつせせいせい上京、発行所に入る。

春の夜よや机ひじの上の肱ひじまくら

明治三十三年

雨に濡ぬれ日に乾かわきたるのぼり幟のぼりかな

明治三十三年

煙きせる管のむ手品の下手や夕涼み

明治三十三年七月二十五日 虚子庵例会。

遠山とおやまに日の当りたる枯野かな

明治三十三年十一月二十五日 虚子庵例会。

美しき人や蚕飼こがいの玉たま襷たすき



明治三十四年

帷かた子びらに花の乳ちぶ房さやお乳ちのひと人

明治三十四年

山寺の宝ほう物もつ見るや花の雨

明治三十五年

肌<sup>はだ</sup>脱いで髪すく庭や木瓜<sup>ぼけ</sup>の花

明治三十五年

打<sup>うち</sup>水<sup>みず</sup>に暫<sup>しばら</sup>く藤<sup>しずく</sup>の雫<sup>しずく</sup>かな

明治三十五年？

或<sup>あるい</sup>は三十二年又は三十四年か。

危坐兀坐賓主いづれや簞きざこつざ  
たかむしろ

明治三十五年七月二十七日 虚子庵例会。

長き根に秋風を待つ 鴨足草ゆきのした

明治三十五年 横浜俳句会。  
この此年九月十九日。子規歿ぼつ。

花はなごころも衣ころも脱ぬぎもかへずに芝居しばいかな

明治三十六年

老おいぼれて人の後しりへに施せまい米まいかな

明治三十六年五月二十五日 虚子庵例会。会者、  
碧梧桐、癖三醉、碧童、左衛門さえもん、醉仏、一転等。

葛<sup>くず</sup>水<sup>みず</sup>に松風<sup>ちり</sup>塵<sup>ちり</sup>を落すなり

明治三十六年

摂待の寺<sup>にぎ</sup>賑<sup>にぎ</sup>はしや松の奥

明治三十六年

秋風や眼中のもの皆俳句

明治三十六年

友は大官芋掘いもほつてこれをもてなしぬ

明治三十六年

瓢ひょうたん 筆たしの窓や人住まざるが如し

明治三十六年

書中古人に会す妻が炭ひく音すなり

明治三十六年

茶の花に暖き日のしまひかな

明治三十六年

坂の茶屋前ほとぼしる春の水

明治三十七年

裏山に藤波かかるお寺かな

明治三十七年四月二十五日 徳上院例会。



ほろくと泣き合ふ尼や 山葵漬<sup>わさびづけ</sup>

明治三十七年

御車<sup>みくるま</sup>に牛かくる空やほととぎす

明治三十七年五月二十五日 徳上院例会。

大海のうしほはあれどひでり早かな

明治三十七年六月二十五日 徳上院例会。

むづかしき禅門出ればくず葛の花

明治三十七年

或<sup>ある</sup>時<sup>とき</sup>は谷深く折<sup>げ</sup>る夏花<sup>ばな</sup>かな

明治三十七年

発<sup>ほっ</sup>心<sup>しん</sup>の髻<sup>もと</sup>を吹<sup>と</sup>く野分<sup>のわ</sup>かな

秋風<sup>あきかぜ</sup>にふえてはへるや法師<sup>ほうし</sup>蝉<sup>せみ</sup>

明治三十七年八月二十七日 芝田町海水浴場例会。

会者、鳴雪、牛歩、碧童、井<sup>せい</sup>泉<sup>せん</sup>水<sup>すい</sup>、癖三醉、つゝ

じ等。

うき巢見て事足りぬれば漕こぎかへる

鎌とげば藜あかさ悲しむけしきかな

明治三十八年七月二十三日 浅草白泉寺例会。会  
者、鳴雪、碧童、癖三醉、不喚楼、雉きじろ子郎、碧梧  
桐、水すい巴、松しょう浜、一転等。

蚊遣火かやりびや縁に腰かけ話し去る

明治三十八年七月二十八日 癖三醉、松浜と共に。

行水ぎようすいの女にほれる鳥からすかな

明治三十八年

客人に下れる蜘蛛くもや草の宿

明治三十八年

蜘蛛くも掃はけば太鼓落して悲しけれ

明治三十八年

相慕ふ村の灯ひ二つ虫の声

明治三十八年

もの知りの長きおもわ面輪おもわに秋立ちぬ

明治三十八年八月十七日 王城、松浜と共に。

花提さげて先生の墓や突当り

明治三十八年八月二十一日

鴨<sup>おうが</sup>涯<sup>がい</sup>、松浜と共に。

村の名も法隆寺なり麦を蒔<sup>ま</sup>く

冬の山低きところや法隆寺

明治三十八年十一月二十六日 浅草白泉寺例会。

座を挙<sup>あ</sup>げて恋ほのめくや歌かるた



明治三十九年一月六日 新年会。みかわしま 三河島喜楽園。  
 会者、癖三酔、松浜、一声、三允、鳴雪、碧梧桐、  
 乙字等。

垣間かいま見る好色者すきものに草芳かくわしき

芳草ほうそうや黒き鳥もこむらさき濃紫

明治三十九年三月十九日 俳諧散心。第一回。小

庵。会者、蝶衣、東洋城、癡三醉、松浜、浅茅。  
なお尚この俳諧散心の会は翌明治四十年一月二十八日  
 に至り四十一回に及ぶ。

草に置いて  
 提ちようちん灯ちんともす蛙かわずかな

明治三十九年四月二日 俳諧散心。第三回。麻布  
たけや竹谷町あんぎよくあん闇玉庵（癡三醉宅）。

山<sup>やま</sup>人<sup>びと</sup>の垣根<sup>かき</sup>づたひや桜狩<sup>さくら</sup>

明治三十九年

藤<sup>ふじ</sup>の茶屋<sup>ちや</sup>女房<sup>にようば</sup>ほめく馬士<sup>まご</sup>つどふ

明治三十九年四月二十三日 俳諧散心。第六回。  
牛込<sup>うしごめ</sup>赤城神社脇、清風亭。

卯の花や仏も願はず隠れ住む

明治三十九年五月七日 俳諧散心。第八回。小  
石川高田あかなすのや（浅茅庵）。

寂として残る土階や花 茨

明治三十九年五月二十一日 俳諧散心。第十回。  
小庵。

門額の大字に点すとも蝸牛かぎゆうかな

主客閑話ででむし竹を上るなり

明治三十九年五月三十日 大谷句仏おおたにくぶつ北海道巡しゅん

錫しゃくの途次来訪を機とし、碧梧桐庵小集。会者、

鳴雪、句仏、六花りっか、碧梧桐、乙字、碧童、松浜。

麻の中月の白さに送りけり

麻の上稲妻赤くかかりけり

明治三十九年五月三十一日 星ヶ岡茶寮小集。

上しょうにん人の俳諧の灯ひや灯取ひとりむし虫

明治三十九年六月十九日 碧梧桐送別句会。星ヶ岡茶寮。

稚児ちごの手の墨ぞ涼しき松の寺

明治三十九年六月二十五日 俳諧散心。第十四回。

芝浦海水浴。

すたれ行く町や蝙蝠こうもり人に飛ぶ

明治三十九年七月二日 俳諧散心。第十五回。芝

浦海水浴。

夏なつ瘦やせの身をつとめけり婦人会

明治三十九年七月十六日 俳諧散心。第十七回。

芝浦海水浴。

六十になりて母無き燈籠とうろかな

明治三十九年



送おくりび火びや母が心に幾いくほとけ  
 仏け

明治三十九年

桐きり一ひ葉とは日当りながら落ちにけり

僧遠く一葉しにけりいしだたみ盤

明治三十九年八月二十七日 俳諧散心。第二十二

回。小庵。

秋<sup>しゅう</sup>扇<sup>せん</sup>や淋<sup>さび</sup>しき顔の賢夫人

明治三十九年

君と我うそにほればや秋の暮

淋<sup>さび</sup>しさに小女郎なかすや秋の暮

明治三十九年九月十七日 俳諧散心。第二十五回。  
十二社、梅林亭。

後家<sup>ごけ</sup>がうつ艶<sup>えん</sup>な砧<sup>きぬた</sup>に惚<sup>ほ</sup>れて過ぐ

明治三十九年九月二十四日 俳諧散心。第二十六回。小庵。

老おいの頬ほに紅潮おくれなざすや濁り酒

明治三十九年十月八日 俳諧散心。第二十八回。

山王社内、楠本亭。

秋空を二つに断てりしいたいじゆ椎大樹

明治三十九年十月十五日 俳諧散心。第二十九回。

山王社内、楠本亭。

煮ゆる時 蕪かぶらじる汁とぞにお匂ひける

明治三十九年

老僧の骨刺しに来る藪蚊やぶかかな

明治四十年

酒旗高ししゆき高野こうやの麓ふも鮎あゆの里

明治四十年 巢鴨すがも、詩瘦会。真宗大学内。

里内裏さとだいり老木おいきの花もほのめきぬ

明治四十一年

明<sup>あけ</sup>易<sup>やす</sup>き第一峰<sup>だいいっぽう</sup>のお寺かな

明治四十一年五月二十八日

蕪<sup>かぶら</sup>むし会。第四回。

寒菊堂。会者、耕村、水巴、知白、東洋城、松浜、

蝶<sup>ちようい</sup>衣。

葛<sup>くず</sup>水<sup>みず</sup>にかきもち添へて出されけり

明治四十一年

駒こまの鼻ふくれて動く泉かな

明治四十一年六月十二日 蕪むし会。第五回。寒  
菊堂。

岸に釣る人の欠あくび伸ふなや 舟あそび遊

明治四十一年七月三十日 蕪むし会。第六回。



曝ばく書しよ風強し 赤あか本ほん飛んで 金きん平びら怒る

書しよ函かん序あり 天地 玄げん黄こうと曝さしけり

明治四十一年八月五日 日盛会。第五回。小庵。

尚この会は八月一日第一回を開きほとんど殆毎日会して八

月三十一日に至る。此時の会者、東洋城、癖三醉、

松浜、水巴、蛇だこつ笏、三允、香村、眉月びげつ、蝶衣等。

ぢぢと鳴く蟬草せみにある夕立ゆだちかな

明治四十一年八月九日 日盛会。第九回。小庵。

羽拔はぬけ鶏どり吃きつきつ々きつとして高音たかねかな

明治四十一年八月十日 日盛会。第十回。

金亀こがねむし子なげう擲やみつ闇やみの深さかな

明治四十一年八月十一日 日盛会。第十一回。

新涼しんりようの驚き貌がおに來りきたけり

草市ややがて行くべき道の露

明治四十一年八月十四日 蕪むし会。第七回。寒菊堂。

冷<sup>ひや</sup>かや湯<sup>とう</sup>治九旬の峰の月

明治四十一年八月十七日 日盛會。第十六回。

仲秋の其<sup>その</sup>一<sup>いっ</sup>峰<sup>ぼう</sup>は愛<sup>あた</sup>宕<sup>ご</sup>かな

仲秋や院<sup>いん</sup>宣<sup>ぜん</sup>をまつ湖<sup>こ</sup>のほとり

仲秋をつつむ一句<sup>あるじ</sup>の主かな

明治四十一年八月二十二日 日盛会。第二十回。

凡<sup>およ</sup>そ天下に去<sup>きよ</sup>来<sup>らい</sup>程<sup>ほど</sup>の小さき墓に参りけり

由<sup>よし</sup>公<sup>こう</sup>の墓に参るや供<sup>とも</sup>連れて

此<sup>この</sup>墓に系<sup>けい</sup>図<sup>ず</sup>はじまるや拝<sup>はい</sup>みけり

明治四十一年八月二十三日 日盛会。第二十一回。

蝨いなごとぶ音杼いなごに似て低きかな

明治四十一年八月二十五日 日盛会。第二十三回。

芋を掘る手をそのままに上京す

明治四十一年八月二十七日 日盛会。第二十五回。

園そのに聞く人語新し野分跡のわきあと

明治四十一年 秋。村上霽せいげつ月来小会。

藁わら寺でらに緑一団の芭蕉ばしやうかな

明治四十一年 秋。蕪むし会。第九回。





# 大正時代

三世さんぜの仏ぶつ皆座ざにあれば寒からず

霜降しもれば霜を楯たてとす法のりの城

死神を蹶ける力無ふき蒲団ふとんかな

その日く死ぬる此身このみと蒲団かな

大正二年一月十九日 鎌倉虚子庵句会。病臥びようがの  
儘まま。

先人も惜おしみし命ふつかきゆう 二日灸

大正二年二月十日 大平山句会。栃木郊外大平山  
茶亭。

春風や闘志いだきて丘に立つ

大正二年二月十一日 三田俳句会。東京芝浦。

大寺を包みてわめく木の芽かな

菊根きくねわけ分剣気つつみて背丸し

大正二年二月二十六日 半美庵偶会。戸塚。

この後の古墳の月日椿かなつばき

一つ根に離れ浮く葉や春の水

大正二年 春。虚子庵句会。

草摘みし今日の野いたみ夜雨来るやうきた

大正二年

舟岸ふねしにつけば柳しに星し一つ

大正二年三月九日 ホトトギス発行所例会再興第  
一回。芝田町汐湯おいに於て。

濡縁ぬれえんにいづくとも無なき落花らかな

提灯ちようちんに落花らの風かぜの見みゆるかな

大正二年 春。鎌倉、雨村庵にて。庵主、宗演老  
師等と共に。

田植すみて東海道雨の人馬かな

大正二年六月一日 虚子庵例会。

今日の日も衰へあほつ日除ひよけかな

古庭を魔になかへしそ墓ひきがえる

螢追ほたるふ子ありて人家近きかな

寝ねし家いえを喜びとべる螢かな

師僧遷化せんげ芭蕉ばしやう玉巻く御寺かな

大正二年七月 第一日曜。虚子庵例会。



灯取虫燭を離れて主客あり

灯ともせば早そことべり灯取虫

大正二年七月 奉天の佐藤肋骨、京城の吉野左衛門、千葉の渡部非砂、東京の仙田木同の諸君、鎌倉に來遊せし時、小町園にて。

秋<sup>あき</sup>雨<sup>あめ</sup>や身をちぢめたる傘<sup>かさ</sup>の下

大正二年九月 第三日曜。子規忌句会。

此秋風のもて来る雪を思ひけり

大正二年十月五日 雨村、水巴と共に。信州  
原ぼら俳諧寺の縁に立ちて。柏かしわ

年を以てもつ巨人としたり歩み去る

大正二年十二月 第三日曜。発行所例会。

我を迎ふ旧山河雪を装へり

大正三年一月 松山に帰省。同月十二日夜、松山  
公会堂に於て。

うき草のそぞろに生おふる古江かな

大正三年一月十四日 京都に至る。祇園左阿弥の  
晚句会に臨む。

時ものを解決するや春を待つ

大正三年一月十六日 大阪瓦斯倶楽部の俳句大会  
に列席。会者八、九十名。青々、墨水、一転、躑つ  
躑つ、巨口、月村、露石、素石、月斗げと、鬼史、王城  
等。

鎌倉を驚かしたる余寒よかんあり

大正三年二月一日 虚子庵例会。

春雨やすこしもえたる手提灯

大正三年三月 第三日曜。発行所例会。

我心あるとき或時あるとき軽しけし罌粟の花

大正三年五月三日 虚子庵例会。

コレラ怖おぢて綺麗きれいに住める女かな

コレラ船いつまで沖に繋かかり居る

コレラの家を出し人こちへ来きたりけり

大正三年七月五日 虚子庵例会。

清水しみずのめば汗あせ軽かろらかにけり

大正三年七月十九日 発行所例会。

一 人いちにんの強きよう者しや唯出ただよ秋の風

秋風や最善の力唯ただ尽す

大正三年九月六日 虚子庵例会。

濡<sup>ぬれ</sup>縁<sup>えん</sup>に雨の後なる一葉かな

大正三年

葡萄<sup>ぶどう</sup>の種吐き出して事を決しけり



蜻蛉とんぼうは亡おわくなり終おわんぬ 鶏頭けいとう花か

大正三年十月十八日 発行所例会。

雲静かに影落し過ぎし接木つぎぎかな

造化すで已すに忙きわを極きわめたるに接木つぎぎかな

大正四年四月十八日 発行所例会。

ふとぼら  
太腹たの垂たれてもの食ふ裸かな

大正四年六月二十日 発行所例会。

からす  
烏飛あけびんでそこに通草あけびのありにけり

大正四年十月九日 京都三条小橋の万屋にあり。

大和の浜ひんじん人來る。 王城、鱸江、秋しゅう蒼そうと共に

句作。

これよりは恋や事業や水温ぬるむ

大正五年二月十一日 高商俳句会。山王境内楠本  
亭。高商卒業生諸君を送る。

麦笛や四十の恋の合図吹く

恋はものの男甚じんべい平女紺しぼり

大正五年六月十一日 発行所例会。

露の幹しずか静かに蝉せみの歩おき居り

大正五年九月十日 子規忌句会。

大空に又またわき出いでし小鳥かな

## 木曾川の今こそ光れ渡り鳥

大正五年十一月六日 惠那中津川えなに小鳥狩を見る。

四時庵にて。島村久、富岡俊次郎、田中小太郎、

清堂、零余子れいよし、はじめ、泊雲、樂堂がくどう同行。

破蕉龍はしょうりゆうを失しつして水仙玉ぎよくをはらめり

大正五年十二月三日 帝大俳句会。九日、夏目漱

石逝ゆく。

闇汁やみじるの杓子しゃくしを逃げしものや何

大正五年十二月二十八日 高商俳句会闇汁会。芙ふ  
蓉居よう。

葛城かつらぎの神鬘みそなはせ青き踏む

大正六年二月十日 帰省の途次堺に寄る。白鳥吟

社主催堺俳句会に出席。泊雲、泊月、躑躅、浜人、  
 はじめ、九品太くほんた、月斗、一転、梅史、桜坡子等おうはしと  
 共に。

山吹の雨や双親堂そうしんにあり

大正六年四月十五日 国民俳句会。江戸川畔清風  
 亭。

春<sup>しゅんすい</sup>水<sup>すい</sup>や  
蠹<sup>ちくちく</sup>々<sup>ちく</sup>として  
菖蒲<sup>しやうぶ</sup>の芽

大正六年四月二十二日 春季吟行。太田妻沼に至  
る車中。

菖蒲<sup>しやうぶ</sup>草<sup>くさ</sup>いて  
元吉<sup>よしむら</sup>原<sup>はら</sup>のさびれやう

大正六年五月三日 帝大俳句会。根津権<sup>ごんげん</sup>現境内  
娯楽園。



大おお墓がま先にあ在り小墓しり後へに高歩み

大正六年五月八日 婦人俳句会。

嘲吏せいらん青嵐

人間吏となるも風流胡瓜きゆうりの曲るも亦また

大正六年五月十二日 虚吼きよこう、吏青嵐、煙村、楚そ  
 人冠じんかん等と小集。鶴見花月園みどり。

蛇逃げて我を見し眼の草に残る

大正六年五月十三日 発行所例会。十六日、さかも阪  
としほうだ本四方太、中川四明、日を同じうして逝く。

よしど葭戸はめぬ絶えずおこぼれ居る水の音

大正六年 某料亭にて。

築見廻やなみまわつて口笛吹くや 高嶺晴たかねばれ

大正六年六月十日 発行所例会。

此松の下たたずに佇めば露の我

大正六年十月十五日 帰省中風かざはや早柳原西の下げに  
遊ぶ。風早西の下は、余が一歳より八歳迄まで郷居せ

し地なり。家空むなしく大川の堤の大師堂のみ存す。  
其堂の傍に老松あり。

天の川のもとに天智てんち天皇と虚子と

大正六年十月十八日 筑前ちくぜん太宰府だざいふに至る。同夜  
都府楼址とふろうしに佇む。懐古。

秋の灯ひに照らし出す仏皆かんぜおん観世音

大正六年十月十八日  
觀世音寺に詣もづ。

何の木のもとともあらず栗拾ふ

大正六年十月十九日  
福岡第二公会堂に於て。

今朝けさも亦また焚たき火びに耶蘇ヤソの話かな

大正七年？  
あるい或は大正六年か。

老ろうのう衲こたつ火燧あに在り立春の禽きんじゆう 獸裏山に

雨の中に立春大吉の光あり

大正七年二月十日 発行所例会。会者、京都の王  
 城、所沢の俳小星、青峰、しやうきよく宵曲、一水、雨葉、  
 しげる、湘海、しゅううん岫雲、みづほ、霜山、今更、  
 たけし、鉄鈴、としを、しひよう子瓢、夜牛、せきてい石鼎。

鞦しゅうせん鞦せんに抱き乗せて沓くつに接吻せつぶんす

大正七年四月十六日 婦人俳句会。柏木かな女居。

野を焼いて帰れば燈下母やさし

大正七年？ 或は七年以前なるべし。

梅を探りて病める老尼に二三言

大正七年？ 或は七年以前なるべし。

山吹にきた来り去りし鳥や青かつし

大正七年？ 或は七年以前なるべし。



船にのせて湖をわたしたる牡丹ぼたんかな

大正七年？ 或は七年以前なるべし。

夏草を踏み行けば雨意人あめいにあり

夏草なつくさに下りて蛇おうつ鳥二羽

大正七年？ 或は七年以前なるべし。

夏の月皿の林檎りんごの紅を失す

大正七年七月八日 虚子庵小集。  
久米三汀等来り共に句作。

芥川我鬼あくたがわがき、

船に乗れば陸情くがあり暮の秋

能すみし面の衰へ暮の秋

大正七年

秋天の下もとに野菊の花弁欠く

大正七年十月二十一日 神戸毎日俳句会。

二三子にさんしや時雨しぐるる心親しめり

大正七年十月二十二日 堺俳句会。この日一転庵

泊。

見失ひし秋の昼蚊のあとほのか

大正七年

菖蒲しようぶ剪きるや遠く浮きたる葉一つ

大正八年 婦人俳句会の連中、鎌倉に来る。はじ

め邸にて。

夏なつ瘦やせの頬ほを流れたる 冠かむり紐ひも

大正八年

蚰げじ蜒げじを打てば屑々になりにけり

大正八年

昼ひる寐ねせる妻しも叱しからず 小こ商あきない

大正八年

扇鳴なんじらす汝なんじの世辞またも亦またよろし

我わを指さす人の扇あふをにくみけり

大正八年

傾きて太し梅雨のちようずばち手水鉢

大正八年

ゆうあじ夕鱒を妻が値うりぎりて瓜の花

大正八年

寝<sup>ね</sup>冷<sup>びえ</sup>せし人不<sup>ふ</sup>機<sup>き</sup>嫌<sup>げん</sup>に我を見し

大正八年

やうくに残る暑<sup>あつ</sup>さも萩<sup>はぎ</sup>の露

大正八年



山のかひに砧きぬたの月を見出せし

大正八年

冬とうてい帝いま先づ日をなげかけて駒こまヶ嶽たけ

大正九年一月 小樽にあるとしを、丹毒のため小樽病院に入院せるを見舞ひ、三十一日帰路につく。

青函連絡船にて。

藤の根に猫びようだ蛇あいう相搏つ妖ようよう々と

大正九年五月十日 京大三高俳句会。京都円山公  
園、あけぼの楼。

どかと解く夏帯に句を書けとこそ

大正九年五月十六日 婦人俳句会。

人形まだ生きて動かず 傀儡師かいらいし

大正十年一月十一日 新年婦人俳句会。かな女庵。  
 昨年十月、軽微なる脳溢血のういつけつにかゝり、病後はじ  
 めて出席したる句会。

雪解ゆきどけの雫しずくすれくに干蒲団ほしぶとん

大正十年

厚あつ板いたの錦にしきの黻かびやつまはじき

新しき帽子かけたり黻の宿

大正十年

新しん涼りようの月つきこそかかれ  
榎まき柱ばしら

大正十一年八月三十一日 川崎俳句会主催新涼句  
 会。大師内涉成園。会するもの、鳴雪、楽天、温  
 亭、普羅、野鳥、風生ふうせい、橙黄子等とうこうし。

日ひ覆おおいに松の落葉の生れけり

大正十二年六月二十八日 風生渡欧送別東大俳句  
 会。発行所。上京中の泊雲出席。

門前に螢追ふ子や旅の宿

大正十二年六月末

早苗取<sup>さなえ</sup>る手許<sup>てもと</sup>の水の小揺<sup>さゆれ</sup>かな

笠<sup>かさ</sup>の端<sup>はし</sup>早苗<sup>さなえ</sup>すりく取り束ね

早苗籠<sup>かご</sup>負うて歩きぬ僧のあと

早苗籠負うて走りぬ雨の中

大正十二年 戸塚俳句会。

月の友三人を追ふ一人かな

大正十二年十月二十二日 丹波竹田の泊雲居を訪と  
 ふ。旧曆九月十三夜、晴れて霧深し。泊月、野<sup>のぶ</sup>風  
 呂<sup>ろ</sup>と共に<sup>たんぼ</sup>出で、田圃道を歩く。白川遅れて来る。

天<sup>てん</sup>日<sup>じつ</sup>のうつりて暗し  
蝌蚪<sup>かど</sup>の水

大正十三年

さしくれし春雨傘を受取りし

大正十三年



棕櫚しゅろの花こぼれて掃くも五六日

大正十三年五月十三日 発行所例会。

老禰ろうねぎ宜ぎの太鼓打うちお居おる祭まつりかな

大正十三年五月十九日 発行所例会。

晩涼ばんりように池うきくさの萍皆動く

大正十三年

蚊かの入りし声一筋や蚊帳かやの中

大正十三年六月

風鈴ふうりんに大きな月のかかりけり

大正十三年七月二十七日 島村元一はじめ周忌（昨年八月二十六日歿）追悼句会。妙本寺の墓に詣もうで島村邸に至る。

炎えん帝ていの威の衰へに水を打つ

暑たに堪へて双親あるや水を打つ

大正十三年七月二十八日 発行所例会。

月浴びて玉崩れくずをる噴井ふけいかな

大正十三年八月

秋の蚊の居りてけはしき寺法かな

大正十三年 鮮満旅行の途次、十月十四日平壤にあり。華頂女学院に於ける俳句会に臨む。正蟀、

帆影郎、沼蘚女等来る。葑城、橙黄子、  
雨意等同行。

ひらひらと深きが上の落葉かな

大正十三年十月三十一日 鮮満旅行の帰路、旅順  
に至る。新市街千歳倶楽部に於て。

水鳥の夜半の羽音やあまたたび

大正十三年十一月 清原枏かいどう童上京偶会。発行所。

北風や石を敷きたるロシア町

大正十三年十一月三十日 鮮満旅行より帰京歓迎

句会。上野花山亭。集るもの温亭、石鼎、雉子郎、  
花はな蓑なみの、秋しゅう桜おうし子、青せい郵そん、たけし等。

酒井野梅其兇の手にかゝりて横死するを悼む<sup>いた</sup>

弥陀<sup>みだ</sup>の手に親子<sup>もろとも</sup>諸共返り花

大正十三年

行年<sup>ゆくとし</sup>やかたみに留守の妻と我

大正十三年十二月二十九日 同人、選者と共に。

発行所に於て。会するもの、肋骨、樂堂、鼠骨、  
 石鼎、温亭、宵曲、堇雨、野鳥、青峰、為山、た  
 けし、花蓑、秋桜子、一水。

ばばばかと書かれし壁の干菜ほしなかな

灯のともる干菜の窓やつむぐらん

庫裡くりを出て納屋なやの後ろの冬の山



大正十四年一月十六日 発行所例会。大阪のもっこ木  
 国、新潟の今夜、みづほ、他に鳴雪、温亭等。

麦踏んで若き我あり人や知る

大正十四年一月二十七日 中田みづほ渡欧送別句  
 会。発行所。たまたま偶々より江来会。

春はるさむ寒のよりそひ行けば人目ある

大正十四年二月

草くさ摘つみに出し万葉の男かな

草を摘む子の野を渡る巨人かな

大正十四年三月

しゅんしやう  
春宵や柱のかげの少納言  
しやうなごん

大正十四年三月

はくぼたん  
白牡丹といふといへども紅ほのか  
こう

あめかぜ  
雨風に任せて悼む牡丹かな  
いた

大正十四年五月十七日 大阪にあり。毎日俳句大

会。会衆八百。

競<sup>くら</sup>べ馬一騎遊びてはじまらず

大正十四年五月二十二日 道後<sup>どうご</sup>に宿泊。松山三番  
町横丁の某クラブに於て。

墓生きて我を迎へぬ久しぶり

大正十四年五月二十六日 松山滞在。老兄と共に

墓参。

老僧の蛇を叱りて追ひにけり

大正十四年六（七？）月

紅<sup>べに</sup>さして寝<sup>ね</sup>冷<sup>ひえ</sup>の顔をつくろひぬ

大正十四年六（七？）月

美人絵の団扇うちわ持ちたる老師かな

大正十四年六（七？）月

我声の吹き飛び聞ゆ野分のわきかな

大正十四年十月

父母の夜長くおはし給ふらん

大正十四年十月

佇たたずめば落葉ささやく日向ひなたかな

大正十四年十一月

かりに著<sup>き</sup>る女の羽織玉子酒

大正十五年一月

夙<sup>と</sup>くくれし志やな露<sup>ふき</sup>の臺<sup>とう</sup>

大正十五年二月 元<sup>はじめ</sup>未亡人露<sup>ふき</sup>の臺<sup>とう</sup>を齋<sup>もたら</sup>す。

古椿ここだく落ちて<sup>よわい</sup>齡<sup>い</sup>かな



芽ぐむなる大樹の幹に耳を寄せ

うぐいすどうぜん  
鶯や洞然として  
ひるがすみ  
昼霞

大正十五年二（三？）月

大正十五年二月十三日 田村木国<sup>もっこく</sup>上京<sup>じやうきやう</sup>歡迎小集。  
発行所。二十日、内藤鳴雪逝く。

大正十五年三月十六日 発行所例会。

唯<sup>ただ</sup>一人船<sup>つな</sup>繋ぐ人や月見草

大正十五年六月二十三日 発行所例会。

古<sup>ふる</sup>蚊帳<sup>がや</sup>の月おもしろく寝まりけり

大正十五年六月

今一つ奥なる滝につづらおり九十九折

大正十五年七月十二日 発行所例会。

橋裏を皆打仰ぐすずみぶね涼舟

大正十五年七月

古書の文字生きて這はふかや灯取虫ひとりむし

威儀の僧扇で払ふ灯取虫

大正十五年七月

草がくれ麗玉秘めし清水かな

大正十五年八月五日  
発行所例会。

庭の石ほと動き湧わく清水かな

大正十五年八月

棚たなふくべ現れ出でぬ  
初はつ嵐あらし

大正十五年九月七日  
東大俳句会。  
発行所。

雨風や最も萩をいたましむ

大正十五年九月

自らの老好おいもしや菊に立つ

大正十五年十(十一?)月

たまるに任せ落つるに任す屋根落葉

徐々と掃く落葉帚ほうきに従へる

大正十五年十一月

掃はきぞめ初の帚や土になれ始む

大正十五年十二月

大空に伸び傾ける冬木かな

大正十五年十二月二十一日 東大俳句会。発行所。



昭和時代

藪<sup>やぶ</sup>の穂に村火事を見る渡舟<sup>わたし</sup>かな

昭和二年一月

藪の池寒鮒<sup>かんぶな</sup>釣<sup>つり</sup>のはやあらず

昭和二年一月二十日 発行所例会。三十一日、次

男 池内友次郎、横浜出帆の筥崎丸はこざきまるにて仏蘭フ西遊学ニスの途に就く。

うち笑えめる老を助けて青き踏む

踏とう青せいや古き石階あるばかり

昭和二年二月二十八日 発行所例会。

木々の芽のわれに迫るや法の山のり

昭和二年三月

巢の中に蜂はちのかぶとの動く見ゆ

うなり落つ蜂や大地を怒いかり這ふ

昭和二年三月十七日 肋骨、為王、楽堂と雑談句  
作。発行所。

ものの芽のあらはれ出でし大事な

昭和二年三月

斯<sup>か</sup>く翳<sup>かざ</sup>す春雨傘<sup>はるさめがさ</sup>か昔<sup>むかし</sup>びと  
人

春山の名もをかしさや鷹<sup>たか</sup>ヶ峰<sup>みね</sup>

一片の落花見送るしずか静かな

櫛くぬぎはら原 ささやく如く木の芽かな

昭和二年四月 京都滞在。光悦寺にて。

濃き日影ひいて遊べるとかげ蜥蜴かな

昭和二年五月十五日 みづほ帰朝歓迎句会。発行  
所。

百官の衣更<sup>か</sup>へにし奈良の朝<sup>ちよう</sup>

昭和二年五月

セルを著<sup>き</sup>て病ありとも見えぬかな

昭和二年五月

鵜飼見うかいみの船よそほひや夕かげり

昭和二年六月 大阪毎日、東京日日新聞社募集の  
日本八景の選抜委員を委嘱され、その候補地を視  
察する為岐阜に至り、長良川の鵜飼を見る。

くづをれて団扇うちわづかひの老尼かな

昭和二年 老人会。



松風に騒ぎとぶなり 水馬みずすまし

昭和二年七月

なつかしきあやめの水の行方ゆくえかな

よりそひて静しずかなるかなかきつばた

昭和二年七月

大<sup>お</sup>夕<sup>お</sup>立<sup>ゆ</sup>来<sup>だ</sup>る<sup>ち</sup>らし<sup>ゆ</sup>由<sup>ふ</sup>布<sup>ふ</sup>のか<sup>き</sup>き<sup>く</sup>も<sup>り</sup>

昭和二年七月 大毎、東日委嘱により別府に至る、  
日本八景の一に当選したる別府の記事を書く為。

わだつみに物の命のくらげかな

昭和二年八月四日 清三郎福岡転任送別東大俳句  
会。丸の内、竹葉亭。

俳諧の旅に日焼し汝かな

昭和二年八月八日

柎童かいどう 上京の為、発行所小集。

此方こなたへと法のりの御山みやまのみちをしへ

昭和二年八月十一日 改造社主催講演会に出席の  
ため高野山こうやさんに赴おもむく。

遅月おそづきの山を出いでたる暗さかな

昭和二年八月十六日 夕。京都に至り、加茂堤に  
大文字を見る。

清閑にあれば月出づおのづから

昭和二年九月 退官せし前の横田大審院長招宴。

鎌倉

秋天の下に浪あり墳墓あり

昭和二年九月十九日 子規忌句会。 田端<sup>たばた</sup>大龍寺。

仲秋や月明<sup>あきら</sup>かに人老いし

昭和二年九月

はじまらん踊にわの場の人ゆきき

昭和二年十月

朝あさ寒さむの老を追ひぬく朝なく

昭和二年十月二十三日 発行所例会。泊雲来会。  
会者百名。

やり羽子<sup>はご</sup>や油のやうな京言葉

東山静に羽子の舞ひ落ちぬ

昭和二年十二月

柗ひいらぎをさす母によりそひにけり

昭和三年二月

草間くさあいに光りつづける春の水

昭和三年四月七日 婦人俳句会。

両の掌てにすくひてこぼす蝌蚪かどの水



昭和三年四月 七宝会。植物園。

行人こうじんの落花の風をかえりみ顧し

昭和三年四月十五日 発行所例会。

遅桜なほもたづねて奥の宮

おもひ川渡れば又も花の雨

昭和三年四月二十三日 泊雲、泊月、王城、比古、

三千女と共に鞍馬貴船くらまきいぶねに遊ぶ。

川船のぎいとまがるやよし雀すずめ

昭和三年六月

姉妹おとといや麦藁籠むぎわらかごにゆすらうめ

昭和三年七月十四日 婦人俳句会。

新涼や仏にともし奉る

昭和三年九月十六日 子規忌句会。大龍寺。十八  
日、石井露月逝く。

ふるさとの月の港をよぎるのみ

はなやぎて月の面おもてにかかる雲

われが来きし南の国のザボンかな

昭和三年十月七日 福岡市公会堂に於ける、第二  
回関西俳句大会に出席。会衆四百。清三郎、禅寺  
洞、より江、久女、しづの女、泊月、玉城、野風  
呂、橙黄子等。

熔岩ようがんの上を跣足はだしの島男

昭和三年十月十日

薩摩さつまに赴き、桜島に遊ぶ。

七ななもり盛の墓包み降ふる椎しいの露

昭和三年十月 赤間宮参拝。

手をかざしぎおんもうで祇園詣やあきびより秋日和

昭和三年十月十六日 泊月と知恩院境内漫步。吉

田町楽友会館に於ける京大三高俳句会に臨む。

枝豆を喰くへばうげつ雨月の情なさけあり

昭和三年十月十九日 木もくげ権会。大阪倶楽部。

旅笠に落ちつづきたる木の实こかな

昭和三年十月二十日 泊月、王城と八幡やわたの男山に  
遊びまた大阪に至る。住友倶楽部に於ける無名会  
に出席。

御室おむろだ田に法師姿の案山かがし子かな

昭和三年十月二十三日 洛西らくせい、岡康之の岳父石

井氏邸にて。

ふみはづすいなごの顔の見ゆるかな

昭和三年十月

秋風に草の一葉のうちふるふ

流れ行く大根の葉の早さかな



昭和三年十一月十日

九品くほんぶつ仏吟行。

寒き風人持ち来るだんろ煖炉かな

昭和三年十二月

ゆるやかに水鳥すすむ岸の松

昭和四年一月

此村を出でばやと思ふ畦あぜを焼く

昭和四年二月

虻あぶ落ちてもがけば丁ちようじ字香るなり

昭和四年三月十八日 発行所例会。

後手うしろでに人渉かちわたる春の水

昭和四年四月一日 立子同伴、京都にあり、泊月、  
 王城、桐一、播水ばんすい、桂樹楼、波川、ながしと共  
 に光悦寺に遊ぶ。秋桜子も亦来る。

眼つむれば若き我あり春の宵

昭和四年四月

漕こぎ乱す大堰おおいの水や花見船

昭和四年四月八日 渡月橋とげつきようの上手より舟を傭やとひ  
て遡そじよう上。

旧城市 柳りゆう 絮じよ とぶことしきりなり

昭和四年 五月十四日発、満州旅行の途につく。

江川三昧東道。五月二十七日、遼陽に至る。

夕立や森を出て来る馬車一つ

昭和四年六月三日 一日ハルビンに至る。八日迄  
滞在。

止りたる蠅追ふことも只ねむし

昭和四年六月十一日 平壤、お牧の茶屋。

短<sup>みじ</sup>夜<sup>かよ</sup>や露<sup>ろり</sup>領<sup>りょう</sup>に近<sup>ちか</sup>き旅<sup>り</sup>の宿

昭和四年六月二十七日 老人会。肋骨、峰青嵐、  
楽天、落<sup>らく</sup>魄<sup>はく</sup>居<sup>きよ</sup>、楽堂、為王等来会。

病身をもてあつかひつ門<sup>かど</sup>涼<sup>すず</sup>み

昭和四年七月十六日 安田句会。

石ころも露けきもの一つかな

昭和四年八月十九日 風生電気局長就任、京童帰朝、祝賀会。折柄ツエツペリン伯号来る。

藪<sup>やぶ</sup>の穂<sup>ふ</sup>の動く秋風見てゐるか

昭和四年十月十日 七宝会。鎌倉浄明寺、たかし  
庵に於て。

子供等に双六すごろくまけて老おいの春

昭和五年一月五日 鎌倉俳句会。極楽寺、寿水庵。

ほつかりと梢こずえに日あり霜の朝



昭和五年一月十九日 発行所例会。

しおり  
栞して 山家集あり 西行忌

昭和五年三月十三日 七宝会。発行所。

しゅんちよう  
春潮といへば必ず 門司を思ふ

昭和五年三月

ふるひ居おる小こささきき蜘蛛くもや立たち葵あおい

昭和五年六月二十七日 鎌倉俳句会。 鴻乙居。 夜、

正福寺谷戸蛩狩。

落らく書がきの顔かほの大おほききく梅雨つゆの堀へい

昭和五年六月二十九日

玉藻たまも句会。 真下邸。

這はい入りたるあぶ虻あぶにはなぎぼしふくるる花擬宝珠

炎天の空美しや高野山こうやさん

昭和五年七月十三日

旭きよくせん川、鍋平朝臣等と高

野山に遊ぶ。

闇やみなれば衣きぬまとふ間の裸かな

昭和五年七月二十四日 東大俳句会。

蜘蛛打つて暫心しばらく静まらず

昭和五年八月一日 家庭俳句会。

もの言ひひて露けき夜と覚えたり

昭和五年八月二十六日 鎌倉俳句会。たかし庵。

秋山くぬぎや櫛くしをはじきさき笹ささを分け

昭和五年九月三十日 第二回武蔵野探勝会。多摩  
の横山。

鉛筆で助じよたん炭たんに書きし覚え書

昭和五年十二月八日

笹鳴会。  
ささなき

東より春は来ると植ゑし梅  
きた

昭和六年一月十七日

椎花庵招宴。  
すいか

菅の火は蘆の火よりもなほ弱し  
すげ あし

昭和六年一月十八日

武蔵野探勝会。江戸川。

せはしげにたた叩く木魚もくぎよや雪の寺

昭和六年二月十二日 七宝会。鎌倉、たかし庵。

大試験山の如くに控へたり

昭和六年二月十三日 東大俳句会。丸ビル集会室。

蒨ふきの臺とうの舌を逃げゆくにがさかな

昭和六年二月二十日 家庭俳句会。発行所。

紅梅の紅の通へる幹ならん

昭和六年三月十二日 七宝会。葉山、水竹居別邸。



蜥蜴とかげ以下啓蟄けいちつの虫くさ／＼なり

昭和六年三月十三日 東大俳句会。

土佐日記懷ふところにあり散る桜

昭和六年四月二日 土佐国高知に著船。国分村に  
紀貫之きのつらゆきの邸址を訪ふ。

植木屋の掘りかけてある梅一樹

昭和六年四月十七日 家庭俳句会。 矢口村、  
新田にった  
神社。

川波に山吹映り澄まんとす

昭和六年四月二十二日 丸之内会館。 金春惣右衛こんぱるそうえ  
門もんにはじめて句を教ふ。

早苗さなえとる水うらくと笠のうち

昭和六年五月十六日 丸之内倶楽部俳句会。第一回。

つくばひのよく濡ぬれてをる端居はしいかな

昭和六年六月十六日

水無みなづき月会大会。安田銀行。

草抜けばよるべなき蚊のさしにけり

昭和六年六月十八日 丸之内倶楽部俳句会。

飛驒ひだの生れ名はとうといふほととぎす

昭和六年六月二十四日 上高地温泉ホテルにあり。  
少婢しょうひの名を聞けばとうといふ。

火の山の裾すそに夏帽振る別れ

昭和六年六月二十四日 下山。とう等焼岳ふもとの麓ふもとまで送り来る。

夕影は流るる藻もにも濃こかりけり

昭和六年七月十九日 武蔵野探勝会。古利根。

大蛾<sup>たいが</sup>来て動乱<sup>どうらん</sup>したる灯虫<sup>ひむし</sup>かな

昭和六年八月十四日 東大俳句会。

蜘蛛の糸がんびの花をしぼりたる

昭和六年九月六日 武蔵野探勝会。  
忍<sup>おし</sup>、川島奇北<sup>きほく</sup>  
邸に赴き、大利根に遊ぶ。

われの星燃えてをるなり星月夜

昭和六年九月十七日 丸之内倶楽部俳句会。

秋風のだんく 荒し蘆の原

昭和六年九月十八日 家庭俳句会。羽田あなもり穴守海  
岸吟行。

仲秋や大陸に又遊ぶべく

昭和六年十月九日 東大俳句会。丸ビル集会室。

初潮に沈みて深き四ツ手かな

昭和六年十月二十二日 丸之内倶楽部俳句会。



秋風や生徒の中の島女

昭和六年十月二十三日 鎌倉俳句会。江の島金亀  
楼。

浦安うらやすの子は裸なり蘆の花

昭和六年十一月一日 武蔵野探勝会。浦安吟行。

たてかけてあたりものなき破魔<sup>はまや</sup>矢かな

昭和六年十一月六日 『週刊朝日』新年号のため  
に。

酒うすしせめては爛<sup>かん</sup>を熱うせよ

働<sup>どうこく</sup>哭せしは昔となりむ明治節

昭和六年十一月十三日 東大俳句会。丸ビル集会

室。

初はつとり鷄や動きそめたる山かづら

昭和六年十一月十四日  
新聞れんごう聯合特信部の依頼。

たらくと藤の落葉の続くなり

昭和六年十一月十五日  
二子ふたこ多摩川吟行。柳家休

憩。

寺の傘茶店かさにありし時雨しぐれかな

昭和六年十一月十九日 丸之内倶楽部俳句会。

羽拔はぬけどり鳥身を細うしてかけりけり

昭和六年十二月二日

鷹<sup>たか</sup>の目<sup>め</sup>の佇<sup>たたず</sup>む人<sup>ひと</sup>に向<sup>むか</sup>はざる

昭和六年十二月十一日 東大俳句会。丸ビル集会  
室。

炭<sup>すみ</sup>斗<sup>とり</sup>は所<sup>ところ</sup>定め<sup>め</sup>ず坐<sup>ざう</sup>右<sup>う</sup>にあり

昭和六年十二月十四日 笹鳴会。丸ビル集会室。

水仙や表紙とれたる古言げんかい海

昭和七年一月二十八日 丸之内倶楽部俳句会。

春の水流れくゝて又ここに

昭和七年二月七日 武蔵野探勝会。  
砧村きぬた大字おおあざ岡  
本字下山、岩崎別邸。

草<sup>くさ</sup>萌<sup>もえ</sup>や大地総じてものものし

昭和七年二月八日 笹鳴会。丸ビル集会室。

風の日の麦踏<sup>つ</sup>遂<sup>い</sup>にをらずなりぬ

昭和七年二月十三日

荻<sup>おぎ</sup>窪<sup>くぼ</sup>、女子大学句会。

学僧に梅の月あり猫の恋

昭和七年二月二十二日

齋なすな会句会。

ぱつと火になりたる蜘蛛や草を焼く

我心ようや漸く楽し草を焼く

昭和七年三月二十四日

丸之内倶楽部俳句会。



花の雨降りこめられて謡うたいかな

昭和七年四月十二日 京都石田旅館にあり。安倍あべ、  
和辻わつじ両君来り、謡二番。

山寺の古文書こもんじよも無く長閑のどかなり

昭和七年四月十六日 蜻蛉会。西山十輪寺吟行。

結縁けちえんは疑うたがもなき花盛がいり

聾青畝ろうせいほひとり離れて花下に笑えむ

昭和七年四月十九日 木権会。大阪俱樂部。

燕つばくろのゆるく飛び居る何の意ぞ

昭和七年五月七日 水竹居祝賀会。四ツ木吉野園。

春の浜大いなる輪が画かいてある

昭和七年五月九日 笹鳴会。片瀬西浜、保岡別邸。

夏草に黄色き魚を釣り上げし

昭和七年六月五日 武蔵野探勝会。石神井しゃくじい、三

宝寺池。

おのずかそのころ  
自ら其頃となる  
釣つりし葱のぶ

昭和七年六月二十一日 水無月会。丸ノ内、安田  
銀行。

はるなこ  
榛名湖のふちのあやめに床しょうぎ几かな

昭和七年七月三十一日 伊香保いかほに遊び、榛名湖に  
いたる。

落花のむ鯉こいはしやれもの髭ひげ長し

昭和七年九月四日 武蔵野探勝会。南拝島、日吉ひえ  
神社前。

夜学すすむ教師の声の低きまま

昭和七年九月十日  
『山茶花』さざんか  
十週年記念大会兼  
題。

くはれもす八雲やくも旧居の秋の蚊に

昭和七年十月八日

出雲いずも松江。八雲旧居を訪ふ。

秋風の急に寒しや分わけの茶屋

昭和七年十月九日 松江を発ち大山に向ふ。大  
山登山。

遅月おそづきの上りて暇いとま申しけり

昭和七年十月十九日 嵯峨野さがの吟行。二条、巨陶居。

山間やまあいの霧の小村に人と成る

顔よせて人話し居る夜霧かな

昭和七年十月二十日 木槿会。大阪俱樂部。

大小の木の實を人にたとへたり

昭和七年十一月十四日 笹鳴会。丸ビル集会室。



描<sup>かきぞめ</sup>初の<sup>つぼ</sup>壺に仲秋の句を題す

昭和八年一月一日 鎌倉宅病臥<sup>びょうが</sup>。  
皿井旭<sup>さらい きよくせん</sup>川  
来、枕頭<sup>ちんとう</sup>に壺の図を描く。

つく羽子<sup>ばね</sup>の静に高し誰<sup>たれ</sup>やらん

昭和八年一月九日 笹鳴会。丸ビル集会室。

襟えりまき卷きつの狐ねの顔は別に在あり

昭和八年一月十二日 七宝会。松韻社にて。日ひ比び

谷や公園。

つづけさまに嚏くさめして威儀くづれけり

昭和八年一月二十一日 家庭俳句会。

凍いてちよう蝶ようの己おのが魂追うて飛ぶ

昭和八年一月二十六日 丸之内倶楽部俳句会。

雪解くるささやきしげ滋おぎさし小笹原はら

昭和八年一月二十七日 鎌倉俳句会。

紅梅つぼみの苔ほみは固ものいし言はずはず

昭和八年二月二十二日 臨時句会。発行所。

鴨<sup>かも</sup>の嘴<sup>はし</sup>よりたらくと春<sup>はる</sup>の泥<sup>どろ</sup>

昭和八年三月三日 家庭俳句会。横浜、三溪園。

立ちならぶ辛夷<sup>こぶし</sup>の蒼行く如し

昭和八年三月三十日 七宝会。あふひ邸。

神にませばまこと美うるはし那な智ちの滝

鬢びんに手を花に御詠歌ごえいかあげて居り

昭和八年四月十日 南紀に遊ぶ。橙黄子東道。那  
智の滝。青岸渡寺せいがんとし。

鶯みゆきや御幸ごしの輿こしもゆるめけん

昭和八年四月十二日 中辺路なかへちを経て田辺に至る。

中辺路懐古。

子ねの日する昔の人のあらまほし

昭和八年四月十九日 大磯一本松、中村吉右衛門きちえもん  
別邸に行く。安田鞞彦ゆきひこの意匠になるといふ庭に  
昔絵を見るが如き稚松多し。

虹<sup>にじ</sup>立ちて雨逃げて行く広野かな

昭和八年五月二十五日 丸之内倶楽部俳句会。

囀<sup>さえずり</sup>や絶えず二三羽こぼれ飛び

昭和八年六月十三日 北海道旭川俳句大会兼題。

浴衣ゆかたき著て少女の乳房高からず

昭和八年七月十二日　おほさき会。発行所。

風鈴の音ねに住すまひをる女かな

昭和八年七月二十四日　玉藻句会。丸ビル集会室。



船涼し己が煙に包まれて

昭和八年 八月十六日発、北海道行。あふひ、立  
子、友次郎、草田男、くさたお夢香、桜坡子、木国同行。  
八月十七日、青函連絡船松前丸船中。

皆降りて北見富士見る旅の秋

昭和八年八月二十一日 るべしべ駅。此夜、阿寒  
湖、山浦旅館泊。

バス来るや虹の立ちたる湖畔村

火の山の麓ふもとの湖うみに 舟ふな遊あそび

昭和八年八月二十二日 阿寒湖。 此夜、弟子てしか屈が、  
青木旅館泊。

燈台は低く霧笛そばは峙だてり

昭和八年八月二十三日  
 釧路港くしろ。此夜、釧路港、  
 近江屋泊。

一筋の煙草たばこのけむり夜学かな

昭和八年九月二十九日 草樹会。学士会館。

加藤洲かとうすの  
 大おお百びやく姓しやうの  
 夜長よながかな

昭和八年十月一日 武蔵野探勝会。  
常陸鹿島神社<sup>ひたちかしま</sup>  
行。

倏<sup>しゅつ</sup>忽<sup>こつ</sup>に時は過ぎ行く秋の雨

昭和八年十月八日 田園調布、橙黄子新居句会。

秋の蝶黄色が白にさめけらし

昭和八年十月二十三日 玉藻句会。丸ビル集会室。

顔抱いて犬が寝てをり菊の宿

昭和八年十一月三日 家庭俳句会。鎌倉、虚子庵。

物の指ものさしで脊せなかくことも日ひみじ短か

来るとはや歸り支度じたくや日短

昭和八年十一月十九日 発行所例会。丸ビル集会  
室。

来る人に我は行く人慈善鍋じぜんなべ

昭和八年十一月二十七日 丸之内倶楽部俳句会。

雑炊ぞうすいに非力ながらも笑ひけり

昭和八年十二月八日 草樹会。丸ビル集会室。

焼芋がこぼれて田舎源氏いなかげんじかな

昭和八年十二月十日 笹鳴会。丸ビル集会室。

白雲はくうんと冬木と終ついにかかはらず

昭和八年十二月十五日 家庭俳句会。渋谷<sup>しふや</sup>、あふ  
ひ邸。

かくれ家をかいま見すれば雛飾<sup>ひな</sup>る

昭和九年二月二十六日 玉藻句会。丸ビル集会室。

白雲のほとおこり消ゆ花の雨



昭和九年四月十三日 大阪に在りしが野風呂の招  
 きにて昨夜遅く嵐山、花の家に著。大堰舟遊。此  
 夜石田旅館泊。

四畳半三間の幽居や 小米花こごめばな

昭和九年四月十四日 蜻蛉会。岩倉実相寺に至る。  
 岩倉公遺跡。

事務多忙頭を上げて春惜む<sup>おし</sup>

昭和九年四月二十九日 発行所例会。丸ビル集会  
室。

つくり雨降らせふきあげ噴き上げぬ

昭和九年六月九日 水竹居招宴。田中家。

酌婦来る灯取虫より汚きたなきが

昭和九年六月十一日　おほさき会。丸ビル集会室。

一々の芥けし子しに囊ふくろや雲の峰

昭和九年六月十五日　家庭俳句会。小石川植物園。

玉虫の光残して飛びにけり

昭和九年七月二十三日 玉藻句会。丸ビル集会室。

水飯すいはんに味噌みそを落して濁しけり

昭和九年七月二十六日 丸之内倶楽部俳句会。

黒揚羽くろあげは花魁おいらんそう草そうにかけり来る

昭和九年七月二十七日 鎌倉俳句会。稲村ヶ崎、  
稲村居。

何となく人に親しや 初はつあらし嵐

昭和九年八月二十三日 丸之内倶楽部俳句会。

よべの時しけ化最も萩をいためしか

昭和九年九月十一日 箱根、見南山荘。

大いなるものが過ぎ行く野分のわきかな

古いにしえの月あり舞しずかの静しずかなし

昭和九年九月二十一日 家庭俳句会。鎌倉、鶴ヶ岡八幡楼門。野分吹く。号外に颯たいふう風京阪地方を襲ひ大阪天王寺の塔倒ると。

並べある木の実に吾子あこの心思ふ

昭和九年十月二十二日 玉藻句会。丸ビル集会室。

秋風や何の煙か藪やぶにしむ

昭和九年十月二十七日 鎌倉俳句会。たかし庵。

川を見るバナナの皮は手より落ち

昭和九年十一月四日 武蔵野探勝会。

浜<sup>はまちよう</sup>町、

日本橋倶楽部。

焚<sup>たき</sup>火<sup>び</sup>のみして朽ち果つる徒<sup>あたら</sup>に非<sup>ず</sup>

昭和九年十一月十二日 おほさき会。丸ビル集会  
室。



神近き おおちようちん 大提灯や はつもうで 初詣

昭和十年一月一日 未明。明治神宮初詣。

みこまい 巫女舞をすかせ給ひて神の春

神慮今鳩はとをたたしむ初詣

昭和十年一月一日 午後。鶴ヶ岡八幡宮初詣。

藪やぶ入いりの田舎の月の明るさよ

昭和十年一月十日 第二回同人会。赤羽橋あかばねばし、春

岱寮。

里方さとかたの葵あおいの紋いや雛ひなの幕

昭和十年三月三日 武蔵野探勝会。あざぶ麻布広尾、近  
藤男爵邸雛祭。

一を知つて二を知らぬなり卒業す

昭和十年三月十二日 笹鳴会。丸ビル集会室。

園丁の指に従ふ春の土

昭和十年四月四日　みづほ歓迎会。百花園。

つばきま  
椿先づ揺れて見せたる春の風

昭和十年四月二十日　あふひ還曆祝。百花園。

船の出るまで　はななくま花隈の　おぼろづき朧月

昭和十年四月二十四日　播水招宴。神戸花隈、吟

松亭。

道のべに阿波の遍路の墓あはれ

昭和十年四月二十五日 風早西の下の句碑を見、  
鹿島に遊ぶ。松山、黙禅邸。松山ホトトギス会。

藤垂れて今宵の船も波なけん

昭和十年四月二十六日 石手寺、湧ヶ淵吟行。豊  
阪町亀の井。此夜神戸舟行。

旅荷物しまひ終りて花にひま

昭和十年四月二十九日 舞子、万亀楼。

秋あき篠しのはげんげの畦あぜに仏かな

ならちやめし  
奈良茶飯出来るに間あり藤の花

昭和十年五月一日 立子と共に大阪玉藻句会出席。  
奈良東大寺裏、宝巖院。

つばくろ  
燕のしば鳴き飛ぶや 大堰川  
おおいがわ

昭和十年五月二日 京都嵐山、花の家。立子と共に。

緑蔭を出れば明るし芥<sup>け</sup>子は実<sup>み</sup>に

昭和十年六月十三日 七宝会。小石川植物園。

楫<sup>か</sup>の音ゆるく太しや行<sup>ぎ</sup>々子<sup>ぎようぎようし</sup>

昭和十年六月二十四日 玉藻句会。丸ビル集会室。



吹きつけて瘦やせたる人や夏羽織

昭和十年六月二十八日 鎌倉俳句会。鎌倉山。

魚ぎよべつ鱈居る水を踏まへて水みずすまし馬

昭和十年七月十一日 七宝会。井いノ頭かしら公園茶店。

山の蝶飛んで乾かわくや宿浴衣やどゆかた

昭和十年八月五日 箱根、松坂屋。一行十三人。

かわくと大きくゆるく 寒かんがらす 鴉

昭和十年十二月十二日 七宝会。松本長ながし氏追善。  
不しのばす忍しの池 畔雨月荘。

大空に羽子はねの白妙とどまれり

昭和十年十二月十三日 草樹会。丸ビル集会室。

観音は近づきやすし  
除夜詣じよやもうで

昭和十年十二月三十一日 浅草観音。



## 青空文庫情報

底本：「虚子五句集（上）」〔全2冊〕「岩波文庫、岩波書店

1996（平成8）年9月17日第1刷発行

底本の親本：「五百句」改造社

1937（昭和12）年6月17日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※新仮名によると思われるルビの拗音、促音は、小書きしました  
※「丸の内」と「丸之内」と「丸ノ内」の混在は底本通りです

入力：岡村和彦

校正：酒井和郎

2016年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 五百句

高浜虚子

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>